

英語授業におけるペアワークの研究

—生徒たちの高めあいのプロセスと教師の支援のあり方—

坂本 南美 廣畑 陽子 安川 佳子 神原 克典 助言者:吉田 達弘

1 研究目的

本研究の目的は、中学校、高等学校の英語授業において、（１）パフォーマンスを重視する活動で、ペアワークを行う学習者たちがどのように学んでいて、お互いに高めあっているのか、また、（２）生徒たちの高めあいを支援するために、教師がどのように介入していけば良いかを、社会認知的、あるいは、社会文化的理論の枠組みから明らかにすることである。

近年、スピーチやロールプレイといった言語活動のプロセスに、ペアワークやグループワークを取り入れ、生徒たちが協働的に取り組む英語授業が増えてきている。このように、生徒たちのパフォーマンスの出来映えが評価されるのは、指導と評価の一体化が重視される中で好ましいことだと言える。しかし、一方で、ペアワークやグループワークの中で見られる協働のプロセスに対しては、必ずしも十分な注意が払われているとは言えない。また、実際、授業中に教師がそれぞれのペアやグループの活動をじっくりと観察し、評価する事は容易ではない。そこで、2年計画の1年目にあたる本研究では、パフォーマンスを重視する言語活動のプロセスの中で、特にペアワークにおける生徒たちの言語的やりとりを詳細に記述・分析し、生徒たちがどのように活動に取り組んでいるのか明らかにすることを目的として研究を進めた。

2 研究方法

本研究では中学校・高等学校において既にデータの収集を終えているが、本報告書においては高校で行った授業に絞って記述する。

(1) 対象者および調査期間

公立高校環境建設工学科1年生40名（男子33名、女子7名）を対象に、コミュニケーション英語Ⅰの授業で「コマーシャル作り」の活動を、2016年9月～11月まで6回行った。「コマーシャル作り」は、生徒が選んだり、考え出したりした商品を宣伝するコマーシャルの発表原稿を書き、それをクラスの前で発表するという活動であった。授業者は、既習の単語や表現、英語らしく読むコツ（リンキング・イントネーション・ストレス）などをあらかじめ指導し、コマーシャル作りの参考になるようにひな形を提示したりした。

(2) 活動の内容とデータ収集の方法

ペアは座席順で決め、合計で20組できた。このペアのうち、授業者が、普段の授業の様子から「発話の多い生徒同士のペア」、「発話の多い生徒と少ない生徒のペア」、「発話の少ないペア同士のペア」と判断した合計3ペアを選び、活動中のそれぞれのやりとりをボイスレコーダを用いて録音した。以下では、紙幅の関係で、そのうちの「発話の多い生徒同士のペア」のデータに限って記述し、分析を行った結果を示す。

(3) データ分析の方法

データ分析については、Storch（2002）によるペアワークのインタラクションパターンの研究を参考にしながら進めた。Storch（2002）は、英語を第2言語として学ぶ大学生を対象として、協働的ライティング活動で、ペアがどのようにタスクに取り組もうとしているか、それぞれがどのような役割を担っているか、また、やりとりにおいては、それぞれがどの程度、関与し、タスクの遂行に貢献しているのかについて調査した。そして、平等性（equality）と互惠性（mutuality）という2つの概念を用いて、ペアでの会話のパターンによりペアの関係性を分類した。平等性とは、学習者がタスク活動を主導する割合を指す。平等

性は、単に、発話の順番交替(turn taking)が平等であるか否かにとどまらず、どちらの学習者が、よりタスク活動の流れを主導しているのか、あるいは、制御しているかで決まる。例えば、一方の学習者がタスクを進める役割を取っていれば(例「じゃあ、次にこの問題をやってみようか」)、平等性は低くなる。一方、互恵性とは、ある学習者の発話に対して、他方の学習者が応答し、会話を展開させていく程度を表す。互恵性の高いペアは、相手の発話に対して同意したり、提案を受け入れたりしながら、お互いの考えを共有することができるペアである。したがって、平等性と互恵性を軸とすると学習者ペアのインタラクションのパターンは、以下の図1のように4象限に分布すると考えられる。

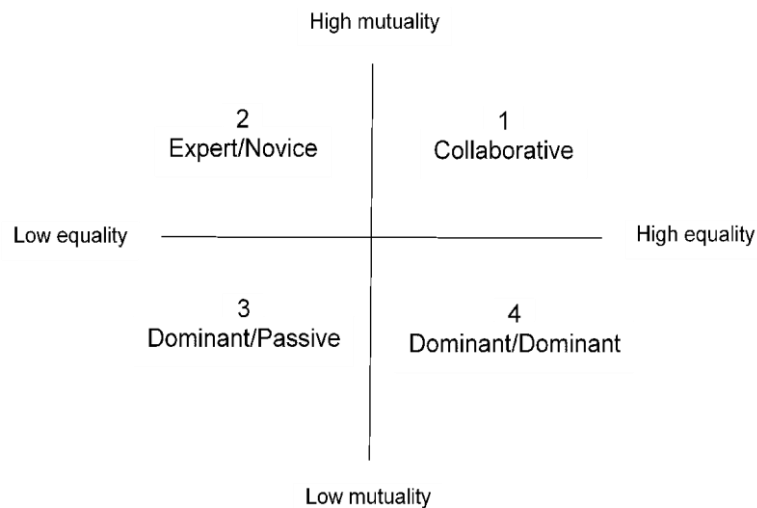


図1. ペアワークにおける学習者のインタラクションパターン (Storch, 2002: 128)

Storchは、これらのペアのインタラクションパターンを、協働型(Collaborative)、熟達者／新人型(Expert/Novice)、支配／受け身型(Dominant/Passive)、支配／支配型(Dominant/ Dominant)としている。

本研究では、Storch (2002)の分析方法を参考としながら、学習者同士の会話の中の発話に機能ラベルを付与し、タスク活動における学習者の役割、タスクの進め方、さらに双方の関与の仕方について分析し、検討した。

3 結果と考察

以下で取り上げた高校1年生のペアのやりとりの分析からは、「コマーシャル作り」という協働的な活動の中で、ストーリー自体を練り出すための作業、また英語の語彙や語法を確認しながら文章として英語で表現するための作業を通して、互いの発話を積み上げていく様子が観察された。彼らの対話を Storch の平等性と互惠性に焦点をあてながらペアパターンのタイプを見てみる。

(1) 会話の平等性について

二人の会話は生徒 M による「さあ、勉強しようか。」という発言から始まっている。タスクの主導権を取りながら、タスク自体の完成に向けて、生徒 M は「～しようぜ」「～したらいいやん」といった表現を盛り込んだ発話を幾度か見せている。「コマーシャル作り」のための発表原稿の作成にあたり、生徒 M は、(1) 英文 12 文以上で完成させなければならないこと、(2) この 50 分の授業でほとんどの英作文を仕上げなければならないこと、の 2 点を意識しながら活動を進めている様子がうかがえる。また、13、15 行目ではタスクの必要条件を確認しながらも、25 行目では、タスク達成を目指してペアの相手を励ましながらか会話を進め、この活動の流れ自体をコントロールしようとする様子も見られる。

- | | | |
|----|---|---------------------------------|
| 13 | M | え？これって何、どこまで書かなあかんの？ |
| 14 | H | 適当ちゃう？ |
| 15 | M | どこまで行かなあかんの。 |
| 16 | H | めっちゃこだわるな。 |
| 17 | M | I don't know this answer? |
| 18 | H | あ、じゃあ。What's up? から始めようぜ。 |
| 19 | M | Hi. What's up? |
| 20 | H | 北山君遊んだらあかん。遊んだらあかんと思うで。今は勉強の時間。 |
| 21 | M | ゆうきで段変えようぜ。 |
| 22 | H | What's up って、どうしたん？やる？ |
| 23 | M | ゆうきいる？ |
| 24 | H | ゆうきいらん？じゃあ、12 までいけんくない？ |
| 25 | M | いくんだよ、がんばって。 |

図 2. ペアの会話 (1)

20 行目で、生徒 H がほかの生徒へと声をかけたためにペア内での話の筋が逸れそうになったが、すぐさま二人の会話を自分たちが今取り組んでいる活動の内容へと引き戻したのも生徒 M である(21 行目)。このように、タスクを進める中で生徒 M が活動自体の主導を取っている割合はやや高く、生徒 M の柔らかなコントロールがあることにより、時間制限のある中でも、自分たちのこだわるところは辞書や先生に尋ねたりしつつ、このペアはほぼ時間内に活動は終わることができた。これらの点から、このペアは平等性の点は低い関係であると考えられる。

(2) 会話における互惠性について

また、会話では二人の短いやりとりを通して、発表原稿作りのアイデアが発展している場面が見られる。以下は、二人が ask という単語について話し合っている場面である。ここでは、生徒 M の問いかけ(84 行目)から ask が引き出されているが、それを使って命令文にするのが正しいのか、Let's を用いた形がいいのか、過去形や現在分詞にする形など、短いやりとりの中で自分たちの持つ知識をすりあわせながら会話は発展し、最後には ask という動詞の原形を使用することで会話は落ち着き、次の単語の検討へと移行している。ここから、どちらか一方が発した問いかけや提案に他方が応答し、提案を受け入れたり、それをもとに自分の持つ知識を掘り起こしたりしながら、問題解決している様子が見えてくる。その点から、このペアのやりとりからは、高い互惠性が観察できる。

- 84 M 先生にたずねるってどういうん？
85 H Ask to the teacher.
86 M Let's asked the teacher?
87 H Let's ておかしいやろ。
88 M Ask teacher やったら、先生にたずねろ的な、命令やろ。
87 H Let's でええんちゃう？
90 M Let's ask the teacher. おかしいかな。
91 H たずねに行こう！
92 M これでええんちゃう。
93 H Asked やったらたずねた。

- 94 M Asking ちゃうん?
95 H Ask でえっか。ちょっとまって。このペンを使って。
This 使う。This pen 使う。Use。

図 3. ペアの会話(2)

以上の分析から、このペアのインタラクションは、平等性はやや低いものの、高い互恵性をもった「熟達者/新人(Expert/Novice)」のパターンを示していると言える。

4 まとめ

本研究では、ペアワークにおける生徒たちのやりとりを記述・分析することで、普段、授業者からは見えにくいペアワークで何が起きているのかを示すことができた。このような記述・分析を通して、生徒たちのやりとりを理解していくと、生徒たちがどのようなリソースを使いながら、活動を遂行し、自力で問題解決しているか、また、教師の介入が必要となるのはどのタイミングであるか、その時の適切な介入の仕方はどのようなやり方であるかを検討する事が可能となる。

次年度も、研究を継続し、さらに多くのペアワークの分析と、2 番目の研究課題であるペアワークへの教師の適切な介入について、さらに検討をしていく。また、本研究から得られた成果を学校内や地域での教員研修で共有することで、ペアワーク、ひいては、英語授業の質そのものを向上させることにつながる事が期待される。

参考文献

- Storch, N. (2002). Relationships formed in dyadic interaction and opportunity for learning. *International Journal of Educational Research*, 37(3-4), 305-322. doi:10.1016/S0883-0355(03)00007-7